遠い国の話ではない

人間学のキーワード

ホワイト・ネイション

White Nation

前川 真裕子　三重大学人文学部特任准教授

「ホワイト」とは色のことではない。白人のことを意味している。つまり「ホワイト・ネイション」とは白人の国家である。しかし白人ということばを用いるからといって誤解しないで欲しい。白人・黒人・黄色人といった人種の分類は、近代科学を巧みに利用しながら生み出された虚構で、現在ではこれらのことばを学術用語として用いる人はいない。白人ということばは、ある問題の所在を明らかにしようとしているのである。

わたしはオーストラリアに七年暮らした。その間、あの国が多文化を謳歌している様を肌で感じてきた。燦燦と輝く太陽、さまざまな言語が飛び交う市場、活気に満ちた町には思い思いの装束に身を包んだ人びとが闊歩する。移民たちは、あの自由で大らかな国を目指しはるか世界を旅してゆくのだ。

しかし一方で、あの国の根底にはイギリスなどヨーロッパに出自を遡ることができる人びとが、支配的な立場を独占するヨーロッパ中心主義的な思想が存在する。文化人類学者のガッサン・ハージはこの問題に取り組んできた第一人者だ。彼は一九九八年に、その名も『ホワイト・ネイション』と題した著作を刊行した。ハージは著作のなかで、多文化主義を推進してきた七〇年代以降のオーストラリアが、多様な出自をもつ移民たちを寛容や平等という理念のもとに受け入れてきたことを批判的に考察している。

寛容に平等、大いに結構ではないか。しかしハージは、それらのことばに隠されたトリックに惑わされてはならないと警告する。まず彼はジョン・ロックの『寛容についての書簡』を分析しながら、人が誰かに対して「寛容であろう」とするときに前提とされる主体と客体の権力構造を指摘する。寛容を実行できる人間とは他者に対して社会的に優位な立場にある人間なのである。例えば領主が領民たちを「寛容に扱う」とはいうが、領民が領主に「寛容に接する」とはいわない。寛容ということばには、このことばを発する主体の潜在的な優位性が内在しているのだ。

オーストラリアにおいて寛容の発話者は、イギリスなどヨーロッパから移住してきた人びとであるとハージはいう。実際、イギリスの入植が始まった一七八八年以来、あの国ではヨーロッパ的な諸規範が主流となってきた。それ以外の国々からやって来た人びとは肩身が狭く、彼らがオーストラリアで暮らしていくためには、それら諸規範に無条件で従う必要がある。オーストラリアはあらゆる人びとにとって平等を約束してくれる国ではない。ヨーロッパ的な枠組みのなかで従順に生きる人間にのみ平等を約束する国だというわけである。「ホワイト・ネイション」とは、この暗黙のうちにされるヨーロッパ中心主義に光を当て、批判的な考察を加えていくためのことばなのである。

ホワイト・ネイションの考えは、日本にいるわたしたちにとっても遠い国の話ではない。周りを見渡せば、そこかしこに不平等さが潜んでいるだろう。この国に潜むのはどのような潜在的優位性だろうか。